

白鳥のこゑ白鳥を貫けり 辻美奈子

先日の朝、アパートの駐車場を出た時、背後から鳥の鳴き声が聞こえてきました。静寂を貫く声に驚き振り向くと、4羽の白鳥が西の方角へ飛んでいく姿が見えました。相馬に白鳥の飛来地があるのか事務室で訪ねたところ、毎年、中村城趾の北側にある蓮池で越冬すること。後日、蓮池に行ってみると、白鳥が羽を休めていました。すぐ近くに冬の到来を告げる使者が来ていたのです。つくづく季節の移ろいを感じます。暦の上では冬に入り、二十四節気の一つ小雪も過ぎました。今年の冬はコロナ禍の中で迎えることとなります。新しい生活様式を実践し、季節性の風邪、新型コロナウイルス、インフルエンザに注意しながら過ごす冬になりそうです。



放送局、和太鼓部が東北大会出場へ

11月15日、県高校新人放送コンテストが行われ、放送局が朗読部門で優良賞、テレビキャンペーン部門で優秀賞を受賞、東北大会の出場権を獲得しました。また、11月22日、日本太鼓ジュニアコンクール福島県支部大会の審査が行われ、和太鼓部が第3位となり東北大会の出場権を獲得しました。東北大会での活躍を期待しています。



第1回相高ART展のご案内

- 【日時】12月17日(木)～24日(火) 9:00～17:00
 - 【場所】相馬市民ギャラリー(相馬駅前振興ビル7F)
 - 【内容】美術の授業作品、美術部作品、出版局・郷土部・書道部の作品。
- ※躍動する生徒の感性を感じていただければ幸いです。

水俣に学ぶこととユージン・スミスの眼差し

～ふくしま浜通りHIGHSHOOL ACADEMY2020に参加する本校生へ～

このたび、本校の2年生6名がNPO法人ハッピーロードネットの上記派遣事業に参加することになりました。12月25日から27日まで、相双地区の他校生と共に熊本県水俣市を訪問します。水俣市は四大公害の一つ水俣病の舞台となり、市民の方々は長期にわたり被害に苦しみ、差別や偏見と闘ってきました。水俣病の教訓と市民の方々の実践について学ぶことは、震災で傷つき、東京電力福島第一原発事故に伴う風評に苦しむ相双地方の方々に勇気と希望を与え、本県復興の手がかりになるでしょう。6名の生徒には水俣の取り組みに理解を深め、本県復興に係る課題を主体的に探究する姿勢を身につけて欲しいと思います。特に派遣先で行われる学習活動や市民の方々と交流を通じて問題発見力を身につけ、帰国後に行われる教育プログラムの中で問題解決力を培ってくださることを期待しています。市立水俣病資料館が掲げる「起きたことに学び、ここに生きる希望をつくる」という言葉は、福島に生きる私たちにも共感できる言葉であると言えるでしょう。

ところで本校生の水俣訪問を知り、真っ先に思い浮かんだのは、米国の写真家ユージン・スミス(1918-1978)のことです。スミスは1971年から73年まで妻と共に水俣に住み、プラスチック製造に

おすすめ書籍



堀田善衛著『未来からの挨拶』(講談社)

堀田善衛(1918-1998)は、私が尊敬する作家の一人です。アジア・アフリカ作家会議に出席するなど、国際的な視野に立ち、現代人が直面する危機を追求した作家でした。芥川賞を受賞した『広場の孤独』のほか、作品は多数あり、特に歴史小説、評伝、エッセイなどは、文明、歴史、人間への深い洞察に裏打ちされており、私の愛読書になっています。本作品は、92年から94年までに訪れた世界各国の都市を主題にしたエッセイです。その中で古代ギリシアでは、『人間にとって過去と現在とは見ることができるものとして前方にあり、未来は見ることができないものとして背後にある』と考えられていたことが紹介されています。《過去と現在が眼前にあって、未来が背後にあるもの》という著者の言葉に、私は得心せざるを得ませんでした。コロナ禍にある今、未来が見えないからこそ、過去に学び、現在をよりよく生きることの大切さを実感しています。

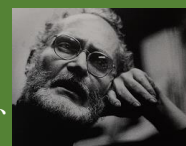
1学年と3学年の野外活動

10月5日、1年生は相馬市内を清掃する奉仕活動に取り組みました。クラスごとに担当区域に移動し、ペットボトルなどのゴミや落ち葉を拾い集めました。学校、相馬駅、宇多川周辺で拾ったゴミは20袋を超え、環境美化に貢献しました。また、3年生は旧相馬女子高校グラウンドで焼き芋を行いました。サツマイモが焼ける間、生徒達はトランプなどのゲームを楽しみました。今年度はコロナ禍による感染予防のため、恒例の芋煮会は行わず、それぞれの学年が工夫をして野外活動を実施しました。終了後は本校グラウンドにおいて、応援団の指導のもと、1年生と3年生による全力校歌が行われました。



使用される化学物質の製造会社チッソによる水銀公害を撮影しました。3年前、東京都写真美術館でスミス生誕100年を記念する写真展が開催されましたが、私はそこで見た〈チッソ工場から排出される廃液〉や〈中央公害審議会での上村智子〉などの作品群に心が揺さぶられました。スミスは、チッソが水俣湾に水銀を垂れ流し、住民の多くが病気になり子供が障害を持って生まれてくる現状を取材し、多くの作品を発表しました。72年には取材中にチッソの従業員に襲われ、一時視力を失う大怪我を負いました。その時の様子は、石牟礼道子の『苦海浄土』第三部「天の魚」にも記されています。スミスはまさに命を賭けて水俣と向き合ったジャーナリストでした。後に出版された写真集「MINAMATA」は世界各国で反響を呼び、環境運動に影響を与えたと言われます。スミスが被害住民に寄り添い、水俣の悲劇をあるがままに撮影した作品群は、「福島」の未来を考える私たちの意識を呼び覚ます「触媒」の役割を果たすに違いありません。参加する生徒諸君には、スミスが水俣に向けた眼差しを作品を通じて知って欲しいと思います。

生前のスミス(「ユージン・スミス写真集」より)



修学旅行が無事に終了しました～秋のみちのく路を満喫した2年生～

【1日目】学校→達谷窟毘沙門堂→毛越寺→中尊寺→えさし藤原の郷→雫石プリンスH

11月3日の早朝、バスは快晴の相馬を出発し、岩手県一関市を目指しました。最初の見学地である達谷窟毘沙門堂は、坂上田村麻呂の創建と伝えられ、懸崖造りのお堂は迫力がありました。次に訪れた世界文化遺産の毛越寺と中尊寺は、紅葉が美しく秋の深まりを感じることができました。毛越寺は広大な境内に浄土庭園を中心に堂宇が並び、往時の姿を留めていました。また、中尊寺では奥州藤原一族の栄華に思いを馳せるとともに、極楽浄土を表す仏教美術の傑作金色堂に目を奪われました。次の「えさし藤原の郷」は平安時代の建物が忠実に再現され、まるでタイムスリップしたような感覚を味わいました。平安衣装体験、弓矢体験、鎧着付体験、トリックアートなどアミューズメントも満載でした。



【2日目】雫石プリンスH→小岩井農場→狛鼻溪→山形国際H

11月4日、時雨模様の雫石を後にし小岩井農場に向かいました。まず、ガイド付きバスツアーで非公開の生産現場や国指定重要文化財の農場施設を見学し、環境保全・持続型・循環型を基軸とした事業運営と近代日本の畜産の歴史について学習しました。まきば園では薄らと雪化粧した岩手山を眺めながら、雄大な自然の中を散策し、ソフトクリームやヨーグルトなどの乳製品を味わいました。狛鼻溪は北上川の支流砂鉄川沿いに高さ50メートルを超える石灰石の岸壁が続く溪谷です。舟下りを楽しみながら、奇岩が作り出す絶景を心ゆくまで楽しむことができました。また、船頭さんが唄う「げいび追分」に、思いがけず旅情を誘われ、私は来し方行く末を思い、涙腺が緩んでしまいました。



【3日目】山形国際H→平清水焼陶芸体験→クラス別研修→道の駅米沢→相馬高校

11月5日、山形市郊外にある平清水焼の七右エ門窯で陶芸体験をしました。窯元の方の説明後、生徒達は皿、茶碗、置き物などの製作に取り組みました。先生方も一緒になって粘土と格闘していました。苦勞して作った焼き物ができあがるのが楽しみです。クラス別研修では1組が立石寺、2組が山形市、3組が米沢市、4組が上市市を散策しました。私は1組に同行し10年ぶりに山寺の奥之院まで登りました。千段を超える石段に疲労困憊でしたが、生徒達は断崖に建つ五大堂からの絶景に感動し、疲れも吹き飛んだ様子でした。また、松尾芭蕉の足跡が垣間見える「せみ塚」に佇み、俳聖芭蕉に思いを馳せる姿もありました。ふもとに下り皆で食べたサクラソノのソフトクリームは絶品でした。



若き相高OB・OGが修学旅行に添乗してくれました

今回の修学旅行は近畿日本ツーリストさんにお世話になりましたが、添乗してくれた社員の方3名のうち2名が相馬高校の卒業生でした。荒鼻史さんは平成26年度卒の入社2年目。昨年度に引き続きの添乗となり、1月の春高バレーにも同行してくれました。プロフィールについては、「校長通信」第9号で紹介したところです。星摩結子さんは平成27年度卒の入社1年目。本校在学中は相馬太鼓部に所属し熱心に活動しました。高校時代の思い出に、部活動に全力で取り組んだこと、春高バレーの応援に行ったことを挙げてくれました。お二人には安全安心で楽しい旅行になるよう、さまざまな面で配慮をいただきました。紙面を借りてあらためて御礼申し上げます。生徒たちは働く先輩の姿を見て、何かを学んでくれたのではないかと思います。フレッシュな二人の今後の活躍を期待し、相馬からエールを送ります。



同窓生列伝⑱折笠晴秀（1885-1965）続編 ～折笠と徳富蘇峰その2～

同窓生列伝⑱において、折笠と徳富蘇峰について記しましたが、今回はその続編です。前回、昭和28年頃から折笠は蘇峰を診察したのではないかと述べましたが、やはり折笠は蘇峰の診察医の一人でした。しかも昭和32年11月2日に蘇峰の最期に立ち会っていました。蘇峰の逝去を報じる同月4日の「毎日新聞」は次のように伝えています。

『徳富蘇峰(猪一郎)翁は去る十五日から熱海市伊豆山足川の自宅「晩晴草堂」でボウコウ炎を病み、緑川、川西、折笠、山川四博士の手当を受けていたが、尿毒症を併発し、二日午後九時三十分死去した。九十四才。』

では、文中の「折笠」とは誰のことなのか。蘇峰と長年交流のあった医師小池重氏の回想から知ることができます。同年12月に徳富家を弔問した小池氏は、『故徳富蘇峰翁と私』（「日本医事新報」第1772号）の中で、次女孝子さんの言葉を次のように記しています。

『今回は本年(三十二)九月十五日下痢症にかり、一時衰弱しましたが軽快し、十月四日には屋外に散歩する位になりました。同月十日頃腹部がはつて苦しく、排尿がわるいので、東京から胃腸科の医師が来て、診察の結果、自分の専門外であるからとて十五日午後湯ヶ原から折笠先生の来診を乞いました。膀胱炎とのこと、何回か導尿して貰いました。後には常置カテーテルとなりまして、大変に苦しみました。食欲が減じ、衰弱が増し、最後の一週間は極めて小食となり、苦しむことなく大往生を遂げました。』

続けて小池氏は次のように記しています。

『折笠晴秀博士は筆者の旧知であるから問合せたところ、病症は老人性膀胱弛緩症とのことだ。天寿という外あるまい。』
 以上のように、蘇峰を診察した医師の一人は折笠晴秀に間違いありませんでした。小池氏は一高から東京帝大医科に進み、折笠とは先輩・後輩の仲でした。自分が心酔する蘇峰の病症が気になり、弔問後、折笠に確認しています。また蘇峰は、昭和32年9月に下痢の症状で衰弱が見られましたが、一旦回復します。10月には腹部の張りや排尿に異常が見られ、東京から胃腸科の医師が診察しましたが、専門外のため折笠が往診し、膀胱炎の診断を下してカテーテル等の治療を施しました。折笠の診断は老人性膀胱弛緩症でした。
 遺言により葬儀は東京港区赤坂の霊南坂教会で執り行われました。11月8日、500人を超える会葬者が別れを告げましたが、折笠は熱海の自宅を弔問に訪れたようで、その時に差し出した名刺が徳富蘇峰記念館に保存されています。名刺には、「32.11.8」の日付がナンバリングされています。明治・大正・昭和の3代を通じて活躍した蘇峰との交流は、翁の逝去によって幕を閉じることになりました。



左：蘇峰の逝去を報じる新聞記事 右：折笠の名刺